ウーバーン（Wooburn）の風景とその遺産

The Landscape of Wooburn and its Heritage

今　村　隆　男
IMAMURA Takao
（和歌山大学教育学部）

2022年７月19日受理

Abstract

The term “Ferme Ornée,” meaning an ornamental farm, is coined by a garden theorist Stephen Switzer, who defines the key aspect of this style of garden design, drawing on Horace, as *utile dulti*, or mingling of pleasure with productivity. It’s a space of bucolic ideal influenced by a reinterpretation of the classical world of *Georgics* by another Roman poet Virgil. The first and a prototypal “Ferme Ornée” is Wooburn Farm in Surrey which was laid out by Philip Southcote in 1734–35, and then not a few “Ferme Ornée” had appeared from the mid–18th Century. But the agricultural revolution and the French Revolution uncovered their fictionality, and they gradually declined and began to be replaced by Model Farms. Although in the 1790s Wooburn was transferred to a practical scientific farm, it has established no small influence on modern gardens and farms. This paper discusses first the details of Southcote’s Wooburn, and then, focusing on the relation between pleasure and productivity, examines the heritage of this “Ferme Ornée” to later periods.

１．序

18世紀前半からイギリスにおいて風景庭園（landscape garden）と呼ばれる広大な庭園を造ることが流行し始めたことはよく知られている。時代を代表する造園家W.ケント（William Kent）は「柵を乗り越え、自然の全てが庭園だとみなした（”He leaped the fence, and saw all nature was a garden”）」（Walpole 138）、というウォルポール（Horace Walpole）の有名な言葉が示しているように、この庭園様式はいかにして庭園という人為空間を園外の自然の風景に似せるのかという課題への挑戦だった。ケントを引き継いで18世紀半ばから風景庭園を170以上も造園して一世を風靡したケイパビリティ・ブラウン（Capability Brown）の庭は、芝生の広がる緩やかな起伏の斜面にクランプと呼ばれる木々の円形の集まりが点在する空間だった。それは、幾何学的な造作で人為が自然を制御したフランス風の整形庭園と対照的に「自然風」とみなされたが、庭園の外に広がるイギリスの実際の「自然」の風景はブラウン的風景とはかなり異なるものだったはずである。わずかな森林と耕作地に適さない荒野を除けば、18世紀当時のイギリスの「自然」は家畜が草を食む草原と麦畑などの耕作地で構成されていた。それならば、自然風の庭園を造るにはこれらの農地を庭園に持ち込むのが適切な手段ではないかという議論が現れてもおかしくはないだろう。実際にその試みは実践されており、農地を導入した庭園、「装飾農園」（Ferme Ornée）と呼ばれるものが18世紀の前半から19世紀に入る頃まで、それほど数は多くはないが国内各地に存在した。しかし、その知名度の低さゆえにか装飾農園の姿やその意義を探ろうとする論考はこれまで殆どなかった。[1] 本稿では、装飾農園の典型例としてウーバーン（Wooburn あるいは Woburn）を取り上げ、今は殆ど失われてしまったこの庭園の詳細を関連文献を通して明らかにし、その上で装飾農園が農業革命以降どのように継承されていったのかを検証して、風景庭園の一形態としての装飾農園の特殊性やその歴史的意義を探ってみたい。

２．「装飾農園」の萌芽

庭園の中に農業の要素を持ち込もうという発想が初めて認められるのは、1712年の『スペクテイター』（*The Spectator*）におけるアディソン（Joseph Addison）の次のような主張である。

But why may not a whole Estate be thrown into a kind of Garden by frequent Plantations, that may turn as much to the Profit, as the Pleasure of the Owner? ...Fields of Corn make a pleasant Prospect, and if the Walks were a little taken care of that lie between them, if the natural Embroidery of the

Meadows were helpt and improved by some small Additions of Art, and the several Rows of Hedges set off by Trees and Flowers, that the soil was capable of receiving, a Man might make a pretty Landskip of his own Possessions.（Addison 2: 286）

ここでアディソンが「牧草地」や「麦畑」に言及していることは、彼がウェルギリウスの『牧歌』や『農耕詩』の古典世界に魅せられていることを表している。アディソンはここで庭園における「楽しみ」と「収益」の共存という理想を語っているが、これは風景における「美と有用性」の融合という18世紀を通して議論されたテーマに対応するものである。18世紀前半という産業革命以前の時代においては、「収益」は主幹産業である農業に直結していた。彼がここで具体的に言及しているのは「牧草地」や「麦畑」のほか、「生垣の列」、「木々や花々」などで、これらの導入によって領地の魅力を引き立たせようというアディソンの論旨の背景には特に『農耕詩』の世界の創造という理想がある。そして、まもなくアディソンのこの主張は農場を庭園内に組み込んだ装飾農園を生むことになる。[2)]

「装飾農園」という表現を最初に使ったのは、スウィッツァー（Stephen Switzer）である。次の文章において「有用で魅力的な」庭園である「装飾農園」はフランス発祥であるかのような表現を彼はしているが、実際は“Ferme Ornée”という言葉はイギリス人スウィッツァーによる造語である。

This Taste, so truly useful and delightful as it is, has also for some time been the Practice of the best Genius's of France, under the Title of *La Ferme Ornée*. And that Great-Britain is now likely to excel in it, let all those who have seen the Farms and Parks of *Abbs-Court, Riskins, Dawley-Park,* now a doing, with other Places of like Nature, declare.（Hunt and Willis 162）

1718年に初版の三巻本が出た後、好評を受けて1742年に増補拡大版が出た庭園論『イコノグラフィア・ラスティカ』（*Ichnographia Rustica*）においてスウィッツァーはこのように述べ、さらにこの「自然のような場所」の構成要素として「麦畑」、「生垣」、「牧場」などを挙げて農園と庭園の融合を説いているが、ここにアディソンの影響を認めることは容易だろう（Hunt and Willis 152-53）。造園家のスウィッツァーはアディソンの理論を実践することを主張しているのである。

ここでスウィッツァーは「装飾農園」の先駆としてアブズコートやリスキンズといった庭園の名前を挙げているが、歴史的に見てその最初の典型的実例として名を残しているのはサウスコート（Philip Southcote）の造ったウーバーンである。サリー州にあるウーバーンは1734-35年に造園されたが、その詳細は1770年に出版されたウェイトリー（Thomas Whately）の『現代造園論』（*Observations on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions*）と、1763年と1769年にそこを訪れたパーネル（John Parnell）の個人的な旅行記の中に認められる。そこでまず、ウーバーンにおいていかに農業と庭園が融合されていたのか、その具体的詳細をこの二人の記述の中に探ってみたい。

3．ウェイトリー『現代造園論』におけるウーバーン

ウェイトリーは『現代造園論』で様々な種類の庭園形態を列挙し、その中の「農園」という項目において装飾農園を扱っている。そこで彼は“Ferme Ornée”という言葉を使わず*“ornamental farm”*と表現し、それは「田舎のあらゆる環境を庭園の境界の中に持ち込む方法」（Whately 177）だとする。そして、装飾農園の部分的な導入例は少なくないがウーバーンほど完璧な例は他に無いとして、具体的にこの庭園の様子を詳述する。それによれば、ウーバーンは丘の斜面に造られた面積約150エーカーの庭園で、そのうちおおよそ半分は牧草地、残りは庭園と耕作地が４分の１ずつである。牧草地の他に農地と言える耕作地を構成するのは主に麦畑だとされている。耕作地と同程度の広さの「高度に装飾された」区域、すなわち「庭園」（garden）があるが、それは遊歩道とその周囲のことである。この遊歩道は花々や灌木などの植物が豊富に植えられ、牧草地と麦畑などを取り囲んでいる。それ以外には、いわゆる“pleasure ground”と呼べる区画はないので、やはりウーバーンは芝生の広がる当時の風景庭園とは全く趣を異にする庭園だったことになる。

園内に置かれた装飾物としてウェイトリーが挙げているのは、「大きな八角形の建造物」や教会の廃墟、「こぎれいなゴシック建築」、さらにはアルコーブ（あずまや）や橋などの建造物である。これらは全て18世紀前半のイギリスの多くの庭園に共通する建物であり、建築装飾に関してはウーバーンは特殊ではなかったことがわかる。

一方で、特にウーバーンに特徴的な装飾としてウェイトリーが注目しているものがあるが、それは歩道の周辺に植えられた花や灌木である。これらについて、彼は次のように書いている。

The buildings are not, however, the only ornaments of the walk; it is shut out from the country for a considerable length of the way, by a thick and lofty hedgerow, which is enriched with woodbine, jessamine, and every odoriferous plant whose, tendrils will entwine with the thicket. A

path, generally of fand or gravel, is conducted in a waving line, sometimes close under the hedge, sometimes at a little distance from it； and the turf on either hand is diversified with little groups of shrubs, of firs, or the smallest trees, and often with beds of flowers: these are rather too profusely strewed, and hurt the eye by their minuteness； but then they replenish the air with their perfumes, and every gale is full of fragrancy. （Whately 179）

サウスコートがウーバーンを造園したあとの1740年代から活躍し始めるケイパビリティ・ブラウンが造園した数多くの風景庭園においては、農業は視界の外に遠ざけられた上、どこまでも芝生が広がる広大な庭園から花々は姿を消した。チェインバーズによれば、花壇が軽視されたこの時代に球根や多年草を多用したところにウーバーンの遊歩道の意義がある（Chambers 162,63）。

ウェイトリーが庭園の中で目につくものとして言及しているのは、遊歩道に付かず離れず並行する「分厚く高い生垣」である。庭園内に取り込むべき要素としてアディソンもスウィッツァーも言及していた生垣について、ウェイトリーは特に詳しく描写している。高さ８フィートほどの生垣の列には、スイカズラやジャスミンといった芳香性の高い蔓性植物がまとわりついており、生垣に面した芝地は樅を始めとする大小の多様な木々や花壇で飾られている。ウェイトリーが特に強調しているのは花々の放つ薫りで、周囲は芳香で満たされつつ、微風がそれを周囲に届けている。つまり、この花々は視覚だけではなく、嗅覚にも訴えかけるよう意図されている。

さらに彼は、この庭に響き渡る音の効果をも強調する。

With the beauties which enliven a garden, are every where intermixed many properties of a farm; both the lawns are fed; and the lowing of the herds, the bleating of the sheep, and the tinklings of the bell-weather, resound through all the plantations; even the clucking of poultry is not omitted; for a menagerie, of a very simple design, is placed near the Gothic building; a small serpentine river is provided for the water fowl, while the others stray among the flowering shrubs on the banks, or straggle about the neighbouring lawn: and the corn-fields are the subjects of every rural employment, which arable land, from seed-time to harvest, can furnish. （Whately 181）

「美しいもの」、すなわち庭園の装飾と混じり合っている「農場の多くの財産」とは、家畜の動物たちのことである。牛や羊の鳴き声や、その首にかけられたベルの心地よい音が周囲に響き渡り、鳥たちの鳴き声もそこに加わる。さらに、「種まきどきから収穫どきまで」麦畑では「田園の仕事」が行われると説明されているが、ここから園内の農地では一年を通して農民たちが作業に勤しんでいることが読み取れる。この説明がちょうど動物の音の効果の説明のあとに置かれていることから、農民たちの農作業の物音も聴覚の効果に一役買っていると考えることもできるかもしれない。以上のように、この庭園が視覚だけではなく、嗅覚や聴覚をも使って楽しむことができる場所になるようにデザインされていることを、ウェイトリーは伝えている。

視覚風景の効果についても風景庭園との相違は明らかである。ウーバーンは丘の上に広がった庭園だったが、その頂きからの眺めは次のように説明される。

The brow of the hill commands two lovely prospects; the one gay and extensive, over a fertile plain, watered by the Thames, and broken by St. Ann's Hill and Windsor castle; a large mead of the most luxurious verdure lies just below the eye, spreading to the banks of the river; and beyond it the country is full of farms, villas, and villages, and every mark of opulence and cultivation. The other view is more wooded; the steeple of a church, or the turrets of a seat, sometimes rise above the trees; and the bold arch of Walton bridge is there a conspicuous object, equally singular and noble. （Whately 180-81）

この描写は日本の借景（borrowed landscape）の技術を想起させる。丘の上から見晴らせるのは一面に点在する「農場や田園邸宅、村々」あるいは教会の尖塔などで、アーチ型のウォルトン橋はこの庭園の装飾として園外に造られたかのようである。実際に、造園時に適度な大きさの建築物を人為的アイキャッチャーとして園外に配置することは、18世紀にはしばしば行われていた。しかし、このウォルトン橋はもともとそこに存在したものを借景として取り込んでいるのである。以上のように、この装飾農園内からは周囲の農地が見渡せるよう意図されていた。言い換えれば、ウーバーンは視覚的に自らの庭園の境界を越えて周囲の農地を取り込んで拡大していると言える。ウェイトリーは装飾農園を「田舎のあらゆる環境を庭園の境界の中に持ち込む方法」だと説明していたが、高台からの眺望に関する彼の説明は、ウーバーンがまさに外部の「環境」を園内に取り込むべくデザインされていたことを明らかにしている。

もう一つ、ウーバーンと周囲の環境との関係におい

て見落とせないのは、園内外の植物の相互作用とでも呼ぶべきものである。遊歩道近くのバラ園や花壇の魅力について語ったあと、ウェイトリーは次のように言う。

...but if the parterre has been rifled for the embellishment of the fields, the country has on the other hand been searched for plants new in a garden; and the shrubs and the flowers which used to be deemed peculiar to the one, have been liberally transferred to the other; while their number seems multiplied by their arrangement in so many and such different dispositions.（Whately 179-80）

つまり、庭園内の花壇の灌木や花々は園外の野の花などと交換可能だということである。ここでは、庭園内にふさわしい装飾としてのいわゆる園芸用の花と、自然の野生の花との区別はされていない。少しでも多くの種類の植物を導入する方が花壇の多様性が増し、それは好ましいことであると説明されているが、結果的に園外の自然環境に自生する植物群を取り込もうとしている点にサウスコートの先見を見出すことができる。18世紀には珍奇な植物を海外から移植することが流行し始めていたが、その時代に園内の植物として何がふさわしいのかを考える手がかりを示しているという意味で、この点は重要だろう。

4．パーネルの旅行記におけるウーバーン

続いて参考にしたいのは、パーネル（John Parnell）の旅行記の中の記録である。アイルランド人である彼は自らの造園の参考にすべく二度にわたってイギリスに出かけた際に多くの庭園を見学したが、二度共にウーバーンを訪問した。パーネルの記述は、訪問時期が近いせいもあって基本的にはウェイトリーとそれほど大きな違いはない。しかし、強調されている点などは異なるので、それらを中心にウェイトリー以上に詳細に記されているパーネルの説明を見ていきたい。[3)]

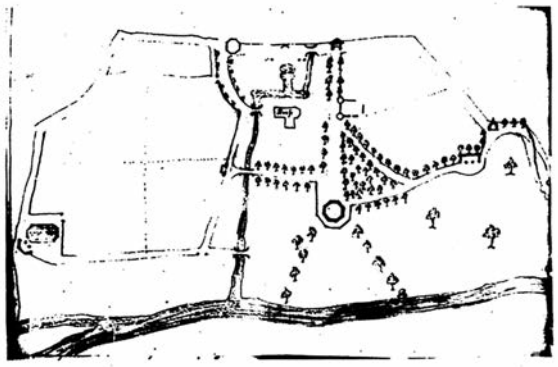
彼の描写の中でまず目を引くのは、園内の木々の豊かさと建築物の豊富さに関する記述である。彼によれば、園内には楡、柳、オーク、トネリコ、モミやトウヒといったさまざまな種類の木々が茂るが、その多くは古木であるとされる。装飾的建築物としてはウェルギリウスの世界に通じる古典的神殿風建物のほか、花瓶や胸像、中国風の橋、隠遁者の庵、修道院の人工廃墟、草葺のゴシック風コテージ、八角形の冷水浴場、ドーリア風の柱に支えられた三角屋根の下のベンチ、そして敷地の中央を占める八角形の建物などがある。その上でパーネルが詳述するのは、ウェイトリー同様に農場としての側面である。高台から見渡せる牧草地には、牛などの家畜や仕事中の農作業者も見える。耕作地には小麦の他、大麦やオーツ麦、そして豆類やクローバーも栽培されているとされる。園内に伸びた大小の様々な水路は主として農業用であると思われるが、狭いものは水鳥のためでもあると書かれており、ここには実際に数多くの種類の鳥たちが飼育されていた。この水鳥たちも「美しく有益である」（Sambrook 85）とされ、有益さの内容は書かれていないが、単なる趣味で飼われているわけではないことがわかる。

パーネルによれば、ウーバーンはお金をかけずに“taste”（趣味）の良さを示す例とされるが、これは他の装飾農園にも共通していると考えられる。広大な風景庭園の造園には莫大な費用がかかったことが知られているが、装飾農園という形態は費用の問題への解決策でもあった。おそらく、それは通常の農場とはあまり変わらないため大規模な土地の変更を必要とせず、造園後も農地からの「収益」が見込まれるということだろう。パーネルは当時の風景庭園の代表例の一つストウ（Stowe）を同じ時期に訪問した際、「土地改良（improvement）」に莫大な費用がかかっていることを指摘した上で、ストウの装飾建築は魅力だが、それに比べてウーバーンは「この上なく見事に美しい風景の殆どを、隣接する地域の対象物に依存している」（Sambrook 95,97）と称賛している。周囲の風景をいわば借景としている点はウェイトリーも同様に指摘していた。また、借景に関しては水路に関するパーネルの次の説明も興味深い。

...from the terrace which lies at the back of the house you have first the finest bold slope to the canal imaginable, the canal extremely broad, winding like a river and so contrived as to lose both extremities in old woods, by which the true length cannot be discovered and you suppose it continued. Beyond it is a further part of the improvements ornamented with pavilions, banqueting houses &c. Beyond it a fine common field with innumerable herds, bounded by the Thames which winds so luckily as to appear a continuation of the artificial canal or rather the canal appears part of the Thames.（Sambrook 93）

水鳥のいる狭い水路とは対照的に「極端に幅の広い水路」はどこまでも続いていると見えるように造られており、あたかも庭園の外側のテムズ川の流れに接続しているかのようである。ウーバーンは園内外の視覚的連続性・継続性を狙ってデザインされているということだろう。

ウーバーンの園内に目を戻してみよう。園内の農地の「収益」に関してパーネルは、「キッチン・ガーデン」（図版１の左端）があること、そしてその東側には「純



図版 1

然たる農場部分」（the absolute farm part）が広がっていることを記録している。これらは、ウーバーンが本格的な農場であったことの証左である。その「農場部分」には数種類の麦や豆類のための 4 つの耕作地と生垣があるが、ウェイトリーも注目していたその生垣はパーネルの地図でも強調されている（図版 1 の中央から右側）。彼によれば、その一部はリンゴの木である。

Then a fine row of apple trees promise a cheerful cup of cider to the honest plowman. You can walk which side of the hedge is sheltered from wind and in the shade in summer. Thus one hedge ornaments two walks, and the woodbine, honeysuckle etc. in the edge perfumes them as the apple blossoms in spring must delight any eye. (Sambrook 99)

リンゴの木は、まさに美と「収益」の両方に貢献する。このリンゴが作り出す「サイダー（リンゴ酒）」は、ウェルギリウスの『農耕詩』第 2 章のテーマであるブドウ酒に匹敵するだろう。[4] リンゴの花の美は視覚的なものだが、生垣は冬には風よけになって夏には日陰をなすという有用性を持ち、さらに両側の歩道を美的に「装飾する」のみならず、生垣にからまるスイカズラはここでも歩道に芳香をもたらす。生垣についてのこれらの記述がウェイトリーと共通していることは明らかである。

パーネルはサウスコートの造園を称賛する際、*“omne tulit punctum, qui miscuit utile dulci”*（“he gains universal applause who mingles the useful with the agreeable.” Sambrook 86）というホラティウスの言葉を引用している。さらにパーネルは、西洋古典への言及にとどまらず、大麦やオーツ麦の畑の持つ「高度な美しさ」（Sambrook 85）を強調する。彼によればウーバーンでは農業の「収益」と庭園美とは単に“miscuit”（mingleあるいはmix）しているのではなく、相互作用的・相互補完的なものだったのである。また、当時の代表的な庭園詩『イギリス庭園』（*The English Garden*）の第 1 巻（1772）でもウーバーンは賞賛の対象になっている。そこで詩人メイスン（William Mason）は、“The simple Farm eclips’d the Garden’s pride,”（「素朴な農場が庭園の誇りを顔色なからしめている」1：522）とウーバーンについて書き、そこは農園でありながら美においても庭園に優っていると説く。農業を取り込んだ庭園は他にも存在したが、多くの場合その農業性は装飾のためのもので実質を欠いていた。1760–70年代、ウーバーンは装飾農園の理想を見事に実現していると称賛されていたのである。

5．イギリスにおける装飾農園の衰退

サウスコートが1758年に死去した直後の60年代にウーバーンを訪れた二人が記録しているこの装飾農園の姿は、おそらくサウスコートの意図したものからそれほど変わってはいなかったはずである。ケイパビリティ・ブラウンがハンプトン・コートを任されて国王ジョージ 3 世のお抱え庭師になったのは1764年のことであるが、彼の手法は植林列で農園を視界から隠してしまうものだった。しかし、風景庭園の最盛期であるこの時期にも、ブラウンの風景庭園とは正反対の性格を持つ装飾農園を支持する声が存在したことが、二人の訪問者の記述からは読み取れる。

サウスコートがウーバーンで試みたのは美と収益の融合した理想郷を造ることだったが、このテーマは18世紀を通して追求され、ウーバーンの他にもシェンストン（William Shenstone）のレゾーズ（Leasowes）などの装飾農園が登場する。ところが、産業革命や農業革命が進展して社会が近代化する中で、クラッブ（George Crabbe）の『村』（*The Village*）やワーズワス（William Wordsworth）の「マイクル」（“Michael；A Pastoral Poem”）などの「アンチ・パストラル」と呼ばれる詩が示しているように、装飾農園を支えていた牧歌的・農耕詩的世界観は現実離れしたものになってゆき、美と収益の両立の維持は徐々に難しくなっていったと思われる。それは、農園関係書にも明らかである。1795年にプロウ（John Plaw）は、「装飾農園」という言葉をタイトルに使用した庭園建築のパターン・ブックの中で、園内に置く実用的な農場建築物として、教会風の牛小屋や作業小屋、修道院風のファームハウス、ドーム型の「浴場」やキノコ型の「羊飼いの小屋」などを提案している。まさに「装飾」農園だが、同時に農場ではないように見せているということは、もはや庭園内で農業を前面に出すことは困難になっていたということだろう。農業革命が進行していたこの時代にはヤング（Arthur Young）やマーシャル（William Marshall）といった農業の実務家による技術改革も進み始めていたが、18世紀の後半は近代科学の萌芽期であったことを思い起こす必要がある。ヤングが事務局長として率いた農業委員会は、1797年から『農業委員

会通信』（*Communications to the Board of Agriculture*）を出し始めるが、その初年から専ら実用的な農場建築物の重要性が訴えられ、多くの提案がそこで行われた。[5)]

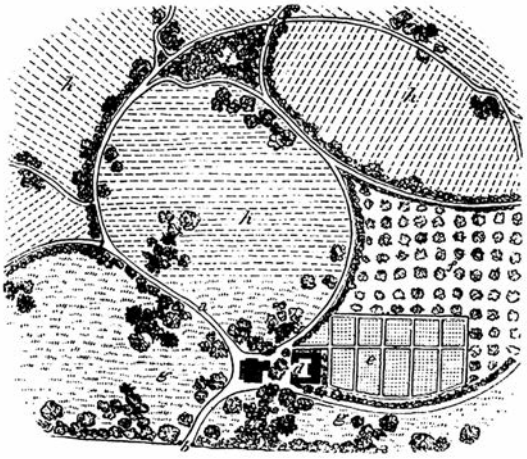
プロウが建築書を出したのは産業革命が進行しフランス革命が始まった時代で、農業大国フランスとの対立がイギリス国内の農業の重要性を高め、国内の食料需要に応えることが急務となっていた。その中で装飾農園は衰退してゆき、それに代わって「模範農園（Model Farm）」と呼ばれる、本格的な農業経営を目指す農園形態が登場してくる。商工業の重要性が増す一方で同時に農業振興の様々な工夫も行われた。一例を挙げると、ジョージ３世は1790年に広大なウィンザー園（Windsor Great Park）の農業顧問としてN.ケント（Nathaniel Kent）を招き、旧来の狩の対象だった鹿を排除して牛・羊を増やしたり、新しい農場を二つ増設してノーフォーク農法などの新しい技術を導入している（Martins 68）。このあと、ビクトリア時代になると装飾農園はイギリスではほぼ消滅し、農園はひたすら効率化、機械化、科学化の道を歩むことになる。

6．アメリカにおける装飾農園の継承

農園をめぐるこのような変化の中でウーバーンが19世紀にまで農場として生き残ったのは、サモン（Robert Salmon）らの農業顧問を1790年代に招いて農作業に水力や蒸気、風力による機械を導入して農業の効率化・機械化を進めたからである（Martins５）。ウーバーンは庭園よりも農場としての性格を強めながら生き残っていったのであるが、その一方で装飾農園としての、つまり美と収益の追求の場としてのウーバーンが19世紀以降の農園の発展に遺したものも少なくない。

装飾農園の具体的な遺産を考える際に注目したいのは、この特殊な農園形態がイギリスで衰退した後になってアメリカに持ち込まれたことである。アメリカの農業理論家ダウニング（Andrew J. Downing）は、『風景庭園の理論と実践』（1841）の中で装飾農園を次のように紹介している。

The embellished farm (ferme ornée) is a pretty mode of combining something of the beauty of the landscape garden with the utility of the farm, and we hope to see small country seats of this kind become more general. As regards profit in farming, of course, all modes of arranging or distributing land are inferior to simple square fields; on account of the greater facility of working the land in rectangular plots. But we suppose the owner of the small ornamental farm to be one with whom profit is not the first and only consideration, but who desires to unite with it something to gratify his taste, and to give a higher charm to his rural occupations. In Fig. 27, is shown part of an embellished farm, treated in the picturesque style throughout. The various trees, under grass or tillage, are divided and bounded by winding roads, *a*, bordered by hedges of buckthorn, cedar, and hawthorn, instead of wooden fences ; the roads being wide enough to afford a pleasant drive or walk, so as to allow the owner or visitor to enjoy at the same time an agreeable circuit, and a glance at all the various crops and modes of culture. (Downing 119)



図版２

「収益」を唯一第一の目的にしたくはない所有者の田園での仕事を魅力的にする「趣味」とは、ピクチャレスクの美的趣味のことである。彼が描いた図面（引用文中のFig.27＝図版２）では、農場部分とそれをめぐる周回道路に生垣が寄り添い、そこから様々な収穫の場が見渡せる。ダウニング自身が、小規模な農場ならこれが普通であってほしいと考えて描いたこの装飾農園のプランからは、ウーバーンが彼の頭の中にあったことが想像できる。

周回道路（*a*）の他にこの地図に描きこまれているのは、農場家屋（*d*）、キッチンガーデン（*e*）、果樹園（*f*）、牧草地（*g*）、麦畑（*h*）などである。農園「全体のピクチャレスクな様式」の中心になっているのは、山査子などの低木からなる生垣である。ウーバーンの場合と同様に、「この種のピクチャレスクな農場では、極端に興味深く好ましい効果が少しの出費で可能となりうる」と装飾農園の経済性に言及したあと、生垣の魅力をダウニングは次のように続ける。

Exceedingly interesting and agreeable effects may be produced, at little cost, in a picturesque farm of this kind. The hedges may be of a great variety of suitable shrubs, and, in addition to those that we

have named, we would introduce others of the sweet brier, the Michigan or prairie rose (admirably adapted for the purpose), the flowering crab, and the like—beautiful and fragrant in their growth and blossoms. These hedges we would cause to grow thick, rather by interlacing the branches, than by constant shearing or trimming, which would give them a less formal, and a more free and natural air. (Downing 120)

ここで生垣を構成する植物として名前が追加されているのは、野バラや地域のつるバラ、野生のりんごなどで、これらは手を加えず放っておけば「自由で自然な感じ」を生み出す。ここには明らかなウーバーンとの共鳴を見出すことができるだろう。

ダウニングの理論を実践したのは、19世紀前半のアメリカを代表するこの農業理論家と親交があり、ニューヨークのセントラル・パークを手がけたことで有名なオルムステッド（Frederick Law Olmsted）である。彼は農園の手本を求めてイギリスに渡った際、残っていた装飾農園を訪れている。イギリスの田園の美しさに感動した彼が特に注目して書き記したのも、５月の花咲く生垣の風景だった。[6)]

彼はその後ボストン郊外のモレイン農園（Moraine Farm）の造園を委託された際、ダウニングの「装飾農園」を参考にした。それは、曲がりくねった周回道路から、それに取り囲まれた様々な作物の耕作地の眺望を楽しめるというウーバーンと共通したデザインの農園だった。そこでオルムステッドは、ダウニングの理論を手本としながらも、19世紀のアメリカの社会的・経済的変化の中で豊かな中西部の農場と競争すべく、動植物の改良、肥料や土地のローテーションの方法の開発などを試みている。具体的に彼の実践について検証しているリックウォーとソーレンよれば、オルムステッドはアメリカ北東部に位置するモレイン農園の、その名前の通り氷河期の土地を調査し、氷堆積質の土壌を改良することで肥沃にして土壌と形状に適合した木々を植え、また季節による洪水を防ぐべく地下に灌漑設備を備えたりした。[7)] しかし、彼がイギリスで学んだものは農業技術だけではない。モレイン農園では科学的知識が植生を豊かにしているだけではなく、装飾農園風の馬車道が円形の周回道路をなし、その道沿いの生垣は視線を牧場沿いに誘って農場を「映画のような」美的風景に変える。つまり、科学的側面だけではなく、この農園の美的側面も見落としてはならないということである。モレイン農園は土壌学・植物学・環境学などの科学的知識に支えられた生産性と、ピクチャレスクな風景美を融合させた、新しい装飾農園だった。

7．ウーバーンの遺産

1790年代のウーバーンにおいて実践された科学農業は19世紀に入ってさらに進化し、アメリカに渡ったあと装飾農園を継承・発展させたが、その他にウーバーンは近代農園に何を遺したのかという問題を考えてみたい。

最も重要だと思われるのは、この装飾農園が園内だけで美を考えるのではなく、周囲の環境も含めて自然の美しさとは何かを考える視点を生んだことだろう。ウーバーンは園内の高台から園外の風景を楽しめるようにデザインされていたが、これはピクチャレスクの風景美の考え方にも共通している。『ピクチャレスク論』（*Essays on the Picturesque*）で知られるプライス（Uvedale Price）は、すでにジョージ３世以前の1770年代に同じN.ケントをヘレフォードの領地フォクスリー（Foxley）に招いて農業経営を委託していた。フォクスリーでの経験を理論化して1794年に出版した『ピクチャレスク論』は庭園論であるが、そこでは周囲の風景も庭園風景と変わらないものとして議論されている。実際に『ピクチャレスク論』での彼の主張の多くは園内のことなのか園外のことなのか判別できず、著者は両者を区別していなかったことがわかる。同じ年に、もう１人のピクチャレスクの唱導家と言えるナイト（Richard Payne Knight）が長編詩『風景：教訓詩』（*The Landscape, a Didactic Poem*）を世に問うている。タイトルには「風景」としか書かれていないが、これも園外の風景も含めた庭園論である。これらのことは、18世紀末には庭園風景とその外側を取り巻く周囲の環境との境界が曖昧になっていたことを意味していると考えてよいだろう。そして、園外にあった風景の中心を占めたのは実際には放牧されている草地と耕作地だった。ピクチャレスクな風景を見るための国内旅行が18世紀に流行するが、その初期の1777年に田園を旅したピクチャレスク・ツーリストの一人ウィッツ（Edward Witts）は「この国全体が装飾農園という劇場だ」と語っている（Williamson 123）。

キーワードであるピクチャレスクという言葉を初めて直接に農業に結びつけたのは、エセックスのスペインズ・ホール（Spains Hall）農園の所有者だったラグルズ（Thomas Ruggles）である。1786年から87年にかけて彼は「ピクチャレスク農業」というタイトルで一連の論考をヤングの出していた『農業年鑑』（*Annals of Agriculture and Other Useful Arts*）に寄せているが、そこで彼が強調しているのは生産性のある自然はそのままで美しいということである。[8)] 牧草地や耕作地の景観に関して重要なのは季節の変化による多様性であり、そこから「我々の生活の至福」や「最も偉大で最も自然な景観美」が生じると彼は言う。そして、生け垣を構成しているごく普通の植物—山査子、野生のリンゴ、柊、ハリエニシダ、野バラ、これらに絡ま

るスイカズラ―の名前を挙げ、有用でありながらその風景はピクチャレスクの美を持つとする。これらは装飾農園の生垣に見出せた植物である。野バラやスイカズラについては香りのよさが強調され、生垣のそばの「必要性のある」水路のせせらぎは「気分をさわやかに」してくれるとされるなど、装飾農園同様に視覚のみならず嗅覚や聴覚によるアプローチも認められる。さらにラグルズは、農場の建物や農機具、あるいは家畜についてもそれが適切で小綺麗であれば風景美に貢献すると説く。彼のこのような主張は、「耕作地は決して醜くくなどない…生垣でさえスイカズラや蔓性植物によってピクチャレスクで美しくなる」(Knight 45n)というナイトに引き継がれている。すでに述べたように、農業革命が進展するにつれて農場という日常的営為のための空間と、庭園という非日常的な美的空間の融合は困難になってゆくが、この目標は一部の農園においては19世紀以降も追求され続けることになる。

以上のように、農園の周囲との連続性の中で風景美を考えたり、農業の日常性の中に美を見出そうとすることがウーバーンの遺産であったと言えるが、その他にもこの装飾農園が遺したものがある。ウーバーンの花壇に置かれた様々な花の種類と位置の詳細がパーネルによって残されているが、そこでは外来種も自生種(在来種)も共存している（Chambers 161)。その多彩な植物の中でウェイトリーが注目して具体的に名前を挙げている花の多くはイギリスの田園のどこにでも見られる自生種で、野生のバラやリンゴ、スイカズラといったイギリスの野原に一般的な植物がそのまま持ち込まれている。オルムステッドはその方針をさらに発展させ、モラインの特殊な土壌に適合した地域の植物を園内に植えることでピクチャレスクな風景を作り上げようとした。その土地の気候や土壌に適合した植物が美しいという考え方は、ロマン派の詩人ワーズワスにも見出せる。例えば彼は1810年に書いたイギリス北部の湖水地方の案内書の中で、成長が早くすぐに収益に繋がるという理由で大量に植林されていた外来種の落葉松の美観を否定し、地域の自生種が最も美しいと樺の木を賛美している(Wordsworth xxix)。これらのことは、風景美とは何かという問いかけに対する先見的な答えとなっているだろう。

また、園内の動植物と多様な感覚を通して交流することも、のちの農園がウーバーンから学んだことである。18世紀の末になるとロマン派の詩人達は「五感」(Each faculty of sense)[9]を通して自然と接するべきことを盛んに奨励するようになる。近代に入ると、風景美や自然美は視覚だけで楽しむものではなくなっていったのである。

さらに、その自然は四季を通して変化し、また動植物は時間の経過の中で成長することを農園主達は意識するようになる。これと関わるが、ウーバーンにおいては「種まきどきから収穫どきまで」の労働に接する喜びにウェイトリーは言及していた。四季の巡りの中での農業労働の価値が評価されているということになるが、労働の価値を体験する場としての農場という考え方も現代に引き継がれたウーバーンの遺産と言えるかもしれない。

8．結

リックウォーとソーレンは、すでに挙げた事例も含めて近現代の農園の様々な進化を紹介しているが、その中には味覚を通して自然に触れられることを意図したレストランを併設した例や、カエルや小鳥の鳴き声をサウンドスケープとして利用した例など数多くの農場が挙げられている。彼女らは、五感を使っての体験を通して自然と交わることが精神的癒しを与えてくれるという役割を農園に求め、その起源をウーバーンに見出している。[10]

装飾農園は、囲われた特殊な非現実的な理想空間ではなく、庭園の外側に広がる農地を園内に導入することによって日常的な自然とどのように交わるべきかを教えてくれる農園形態だった。その背景には、18世紀のイギリスにおいて「自然」と呼ばれる場所の殆どは原野・荒野ではなく、人間の手の入った牧草地や耕作地などの農地風景だったという事情があるだろう。ウーバーンから始まる装飾農園は、生活の中で日常的に周囲に目にする農地との接し方やその美的価値を学ぶ実験場とでも呼べる場所であり、その遺産はイギリス国外も含めた近現代の農園に継承されていったのである。

注

1）これまでの研究において装飾農園は風景庭園の「周縁的」な一形態とみなされ、わずかのページで紹介程度の扱いしか受けないことが多かった。概論ではあるが装飾農園の意義を正面から論じているのはチェインバーズとセイヤーで、本稿で取り上げたチェインバーズは装飾農園を一種の“farm museum”として扱っており、セイヤーは装飾農園にみられる領主の側の“benevolence”に注目して社会的調和の象徴と見ている。ウーバーンに関しては、本稿で参考にしたKingとSambrookがウェイトリーとパーネルを含む同時代人の記録をもとにサウスコートの造園当時の様子を具体的に再現しようとしている。

2）クロフォードは、イギリスの農耕詩の始まりをフィリップス『サイダー』(1708)、最後をジャーゴ『エッジ・ヒル』(1767)としているが、これはちょうどアディソンが装飾農園の理念を表してからウェイトリーやパーネルがウーバーンを訪問した時代に重なる。Crawford、特に第４－６章を参照。

3）パーネルによるウーバーンの訪問記録“An account of the many fine seats of nobles I have seen, with other observations made during my residence in England in 1763”、および“Journals of a tour thro' England and Wales, Anno 1769”の原稿は、それぞれワシントンDCのthe Folger Shakespeare Libraryとロンドンのthe

British Library of Political and Economic Scienceに残されているが、本稿ではこれらをもとにしたSambrookの論文から引用している。

4）ウェルギリウスの『農耕詩』のテーマはそれぞれ、第1章「畑の耕作」、第2章「果実（ブドウとオリーヴ）の栽培」、第3章「家畜の世話」、第4章「養蜂」となっているが、ウーバーンでは養蜂以外は実践されていたことが記録から確認できる。イギリスでは18世紀当時はブドウが栽培されていなかったため、代わりにリンゴからサイダーが造られたと推測できる。

5）具体例としては、*Communications*. Vol. 1.に載せられたホランド（Henry Holland）やビーツソン（Robert Beatson）の寄稿文などを参照。

6）オルムステッドは、生垣やその周囲の風景について次のよう記している。“There we were right in the midst of it ! The country and such a country! green, dripping, glistening, gorgeous! We stood dumb-stricken by its loveliness, as, from the bleak April and bare boughs we had left at home, broke upon us that English May－sunny, leafy, blooming May－in an English lane ; with hedges, English hedges, hawthorn hedges, all in blossom; homely old farm-houses, quaint stables, and haystacks; the old church spire over the distant trees; the mild sun beaming through the watery atmosphere, and all so quiet the only sounds the hum of bees and the crisp grass-tearing of a silken-skinned, real (unimported) Hereford cow over the hedge.”（Olmstead 86-87）

7）モレイン農園の詳細については、Lickwar and Thoren 60-71を参考にした。

8）ラグルズについては、今村 396-401を参照。ラグルズはのちに貧困についての著書も残しており、農地をそのままにせよということではなく、貧しい農民の実態も視野に入れた上で農園を健全化する主張を行なっていると考えられる。Cf. Watkins 54.

9）S. T. Coleridge“This Lime-tree Bower my Prison,”（1797年執筆）line 63.

10）Lickwar and Thoren 269-70、およびShenyang Architectural University, Babylonstoren, Los Poblanos Historic Inn and Organic Farmを取り扱った章を参照。

図版1： Sambrook 84.
図版2： Downing 120.

参考文献

Addison, Joseph, et al., *The Spectator*. ed G. Gregory Smith. 4 vols. Tronto, 1930.

Brogden, William Alvis. *Ichnographia Rustica: Stephen Switzer and the Designated Landscape*. Routledge, 2017.

Chambers, Douglas. *The Planters of the English Landscape Garden: Botany, Trees, and the Georgics*. Yale University Press, 1993.

Coleridge, Samuel Tylor. *Sibylline Leaves: a Collection of Poems*. London: Rest Fenner, 1817.

Communications to the Board of Agriculture; on Subjects Relative to the Husbandry, and Internal Improvement of the Country. Vol. 1. London: W. Bulmer, 1797.

Crawford, Rachel. *Poetry, Enclosure, and the Vernacular Landscape 1700-1830*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

Downing, Andrew J. *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening*. London and New York: Wiley and Putnam, 1841.

Hunt, John Dixon, and Peter Willis. *The Genius of the Place : the English Landscape Garden, 1620-1820*. Cambridge, Mass. : MIT Press, 1988.

King, R. W. “”Ferme Ornée”: Philip Southcote and Wooburn Farm.” *Garden History*. 2.3. (1974): 27-60.

Knight, Richard Payne. *The Landscape, a Didactic Poem*. 2nd ed. London: W. Bulmer, 1795.

Lickwar, Phoebe, and Roxi Thoren. *Farmscape: the Design of Productive Landscape*. London and New York: Routledge, 2020.

Martins, Susanna Wade. *The English Model Farm: Building the Agricultural Ideal, 1700-1914*. Oxford: Oxbow Books, 2002.

Mason, William. *The English Garden: A Poem*. 1772-81; rpt. York: A. Ward, 1783.

Olmstead, Frederick Law. *Walks and Talks of an American Farmer in England*. New York: G. P. Putnam, 1852.

Plaw, John. *Ferme Ornée; or Rural Improvements*. London: I. & J. Taylor, 1795.

Ruggles, Thomas. “Picturesque Farming.” *Annals of Agriculture and Other Useful Arts*. Vol. 6, 7, 8, 9. London, 1786-87.

Sambrook, James. “Wooburn Farm in the 1760’s” *Garden History*. 7.2 (1979): 82-101.

Sayre, Laura B. “Locating the Georgic: from the *Ferme Ornée* to the Model Farm.” *Studies in the History of Gardens & Designed Landscapes*. 22.2 (2002): 167-92.

Switzer, Stephen, *Ichnographia Rustica, or, The Nobleman, Gentleman, and Gardener’s Recreation*. 2 Vols. London: J. and J. Fox, 1742.

Walpole, Horace. *Anecdotes of Painting in England*. 4 vols. Strawberry-Hill: Thomas Kirgate, 1771.

Watkins, Charles and Ben Cowell. *Uvedale Price (1747-1829) --Decoding the Picturesque*. Boydell & Brewer, 2015.

Whately, Thomas. *Observations on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions*. London: T. Payne, 1770.

Williamson, Tom. *Polite Landscapes: Gardens and Society in Eighteenth-Century England*. Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1995.

Wordsworth, William. “Introduction.” *Select Views in Cumberland, Westmoreland, and Lancashire*. London: R. Ackermann, 1810.

今村 隆男.『ピクチャレスクとイギリス近代』. 東京：音羽書房鶴見書店, 2021.